

長崎の人に親しまれた

山のサンタ・マリア教会

結城 了悟

歴史は人間の諸行の結果であり、それを伝えるのは其の時代の記録であり、そして其の出来事を心に想起させるのは記念碑であろう。

例えば、十六世紀の終り頃、東洋のキリスト教では三つのコレジオが有名であった。その一つはゴアのサンパウロ、二つめはマカオのサンパウロ、三つめは長崎のサンパウロであった。いずれのコレジオも、イエズス会神父達の本部で、司祭や伝道士達の教育施設であり、そこは其の地区の文化交流の場でもあった。

そのコレジオは信者達にとって祈りの場として親しまれ、其の場所には、必ずマリア様に捧げられた教会が建てられていた。

ゴアには一五〇一年、アルフォンソ・デ・アルブケルケによって建てられたロザリオの聖母教会があり、マラッカには港を見おろす小高い丘にサンタ・マリアの教会があった。そして長崎には立山の木の茂った山裾に小鳩の巣のような、やさしい心の休みへの招きとして山のサンタ・マリアの小聖堂が建っていた。

ゴアには今も白い教会が聳えている。其の教会では聖ザビエルが子供達を集め賑かに教理を教えていた。

マラッカのサンタ・マリア教会は聖ザビエルが夜中に祈りを捧げた場所であり、一五五五年にザビエルが上川島でなくなられた時、その遺体運び葬られた教会である。現在でも当時の教会の正面の壁が残っている。



現在は他所に移されているサンタ・マリアの記念碑

長崎のサンタ・マリアの教会は一六一四年禁教令のためこわされてしまった。その教会の跡には二年前まで長崎奉行所の石垣をバックに小さな記念碑が建てられていたが、長崎奉行所が復原された時、目のとどか

らしい聖母の画像があった。(この画像はジョアン・ニコラオ神父の作品と考えられる)

また、五月二十日(火)と二十九日(木)にも別のキリシタン行列の組が山のサンタ・マリア教会に立ち寄った記録がある。これほど長崎の人達に親しまれ、信者達の熱心な祈りがあった教会にも拘わらず、教会は幕府の命令によって取り壊されてしまった。その時の状況をアビラ・ヒロンは悲しみをこめて感動的な文章で次のように綴っている。

この時、大村の殿はサンタ・マリア教会の取りこわしを引きうけさせられた。私は其の教会から二〇〇歩あまり隔った同じ町内に住んでいた。取り壊しは十一月五日に始まり、中二日おいて八日には終わりました。この教会は聖なる司教ドン・ルイス・セルケイラ様が、あれほど喜びをもって完成され、司教様の手によって最初のミサが捧げられた教会なのです。あの清らかで美しく町の人達が親しみと崇敬の心をもって出入した教会、山のサンタ・マリアの教会が今、私達の目の前から無惨にも取りこわされてしまったのです。

この時、取り壊した大村の殿も、其の家来の人達も、すぐその前は全てキリシタンの人達だったのです。其の人達も涙を流していたようでした。この清らかで神々しかった山のサンタ・マリアの教会の最後の壊しになった時、長崎のキリシタンの人達が抱いた悲しみと、其のなげき、そして、其の人達が流した涙は実に大変なものでした。そして其のなげきの声は、今でも、しっかりと私の思い出の中に残っています。

この山のサンタ・マリアの教会は、長崎の歴史の上で重要な一ページであったのです。

山のサンタ・マリアの教会が破壊され、其の跡地には禅宗春徳寺が建てられたが、同寺は間もなく城跡の現在地に移っている。(この地もキリシタン時代にはトウドス・オス・サントスという教会があった)。そして、此の立山・春徳寺跡には大目附でキリシタン改のため長崎に来た井上筑後守の役宅が建てられ、井上氏が江戸に帰った後は空地となっていたが、一六七三年(延宝元)には長崎奉行所(立山奉行所)がこの地に建てられていた。

(前二十六聖人記念館・館長)

ない場所に移されてしまっている。

この長崎のサンタ・マリア教会が何時頃建立されたか明らかでないが、一五八四年には既に長崎の人達から親しまれていたため数々の記録が残っている。

例えば、一六〇一年それまで長崎内町のうちクルス町にあった墓地が立山の地に移された記録には次のように記してある。

新しい墓地が大きな信心を集める聖母マリアに捧げる小聖堂の近くに造られた。小聖堂は町の発展と共に大きくなり、その建物の為に石垣を造り土地を拡大した。二年後(一六〇三年)その教会が小教となり長崎生まれのミゲル・アントニオ神父が最初の主任司祭になった。同年、教会の裏に湧き出していた泉の水が、庄屋の家まで流れるように水路が造られた。

その頃、上町には此の教会から二〇〇m離れた所にスペインの商人アビラ・ヒロンが住んでいた。彼には「日本大日記」という著書がある。その著書の中に一六一四年の春、家康の禁教令が發布されたとき、この法令が実践されないように、祈りと苦行の行列が山のサンタ・マリア教会まで行った事が次のように記してある。

五月十四日(水)行列はサン・ジュアン・バプティスタ教会(現・本蓮寺)から出発アビラ・ヒロンの家の前を通り「山のサンタ・マリア教会」に行き、そこから墓地にそってサン・ドミンゴ教会(現桜町小学校)まで続いた。

彼は亦、次のような文も記している。

サンタ・マリア教会には二つの門があり、教会祭壇の上には実にすば

風信

○四月と言えば八日の花まつり(お釈迦様の誕生日)、二十一日はお大師様の日であり、市内のお大師様を巡礼し、お接待をうける。

○また長崎の四月は「ハタあげ」の季節である。大きな「ハタ」を私達は「ツブラカシ」と言った。「ネヨマカすり」、「ヤダモン」等という言葉もあったが、今でもあるだろうか。

○四月一日には国指定史跡「出島オランダ屋敷」の復原完成公開の式典があり、四月八日より「長崎市立歴史民俗資料館」が長崎国際文化会館内旧長崎市立博物館跡に移転、開館したので「是非お出かけ下さい」と同館の永松館長が来訪され、御案内があった。

○四月に入ると「長崎さるく博」が開始され、各方面より本会事務局にも問い合わせ多く、事務局の上田女史は一人で天手古舞いをしておられる。

○四月より月二回の本会古文書研究会発足しました。四月は四日(火)・十八日(火)午前十時三〇分より十二時まで、自由に御参加下さい(会費不要)、世話人・宮田修二・米田輝臣・川原清・古賀昭子

○富山県高岡市の地方史研究家山本和代子女士より加賀前田藩高岡城下町の歴史を解明された「古城萬華鏡」を戴いた。長崎にも縁故のあるキリシタンであり茶人でもあった高山右近は秀吉に追放され天正十六年(一五八八)以来二十六年間も前田藩に止まっていた。私は此の本より色々教えて戴いた。(桂書房刊二、〇〇〇円)

○CCC研究所長として活躍しておられる崎谷満医学博士より先日「DNAが解きあかす・日本人の系譜」を戴いた。本書の内容は日本民族の成立をウイリスの研究と、諸言語の成立を踏まえての新研究であり、私は其の第一ページより引き込まれてしまった。博士は最後に「日本列島に於けるヒト集団の多様性に関する研究が二十一世紀となりDNA多型分析により実証された」と記されている。(勉誠出版刊・三、五〇〇円)

○四月二十一日は媽祖様の誕生日であり、崇福寺で媽祖祭がある。参加希望者は事務局上田まで。(電八二二一・二五四〇)

長崎歴史文化協会研究室

TEL八二二一・二五四〇
十八銀行公会堂前出張所二F

